

第3回

新宿区次世代育成協議会・部会

平成23年11月18日（金）

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

○福富部会長

皆さん、こんにちは。今日を含めて、あと2回、部会が予定されております。その部会で、若者を支援する、より具体的な取り組みについて議論をし、最終的に全体の協議会に報告という流れで進めていきたいと思っております。

前回10月の全体協議会で、第1回目と第2回目の部会活動を報告いたしました。今日は、まず始めに、皆さん御出席されていましたが、資料1をもとに前回の協議会について振り返ってみたいと思います。

1つ目の、若者を支援する既存事業の広報啓発及び相談体制の充実・強化についてです。周知のチラシを作って、公共施設に置くだけでなく、若者の集まりそうな場所や若者の情報収集方法にあった周知を行うことが大事ではないか。また、ひきこもりなど困難を抱えた若者に直接情報を届けることの難しさを考えた場合、家族や支援者から情報を届けるといった間接的な情報提供といったことも考えていく必要があるのではないだろうか。このような報告をしたところ、啓発活動については「あんだんて」の利用者増加の要因を分析することによって参考にすべきところが見えてくるといった、御意見をいただきました。

また2つ目の若者を支援する機関の連携充実・強化について、既存の会議体である「子ども家庭サポートネットワーク」に若者支援の部会を加えることによって、連携充実・強化を図るネットワークのご提案をしたところです。このネットワークは、児童福祉法が基になっているのでしたっけ。

○事務局

ご提案のネットワークではありません。既存のネットワークである「子ども家庭サポートネットワーク」が、児童福祉法にもとづく要保護児童対策地域協議会です。その要保護児童対策地域協議会の機能も持った、若者支援ネットワークのご提案でございます。

○福富部会長

そうでしたね。そのような形で、報告をいたしました。

この広報啓発活動や関係機関の連携充実についての他に、資料にもありますように若者支援においては、雇用に結び付いた結果の数だけを見るのではなく、結び付く前の社会参加の気持ちやコミュニケーションといった内面的なものに時間をかける必要があるといった議論もなされたところです。これも、最終的な提言の中に、何らかの形で反映していくべきポイ

ントだと考えております。

以上、前回の全体会の振り返りを踏まえて、本日のテーマを少し考えていきたいと思います。そこで、資料の2を、ご覧ください。

本日の部会のテーマは、「困難を抱えた若者の早期発見と対応」です。この若者支援については、昨年度の協議会でもテーマとして取り上げられておりまして、早期発見・早期対応に向けた取り組みの実施として、まとめられたものが四角の囲みに入っています。

現状への対応として、ちょっと、読んでみます。「年齢とともに、課題が長期化し深刻化することを防ぐために、例えば、学校と地域が協力して、早期発見・早期対応の体制を作ることが考えられる。また、子どもから若者への成長時期や発達段階ごとに、各機関のつなぎをより丁寧にし、早期からの支援のつなぎを望みたい。」と、このように提案したわけです。これについては、前回の全体会にご提案した、ネットワークの設置で対応を望みたい。

次の予防的な対応について、こちらも読んでみます。「各種の調査において、困難を抱える若者は、他者とのコミュニケーションが苦手であることが指摘されている。学校や児童館などにおける、コミュニケーション能力の向上支援や「生きる力」をはぐくむことも有効な予防策と考える。」ここが、本日、皆さんと議論を深めていきたい大きなポイントです。コミュニケーション。第1回の部会から既に、様々に議論されていたところです。顔と顔とが見える「Face to Face」のコミュニケーションが大切である。いや、今の時代、そんなことを言っていては、取り残される。携帯電話やインターネットの普及は、どんどん進んでいる。さらには、それぞれ良い面も悪い面もある、それをミックスした形もあるのではないかと、いろいろ、御意見がありました。

さて、これから御意見を交わすにあたって、資料の3ですね。現在の次世代育成支援計画を策定する前に実施した調査の中から、コミュニケーションについて、何かヒントになるような所を抜き出した資料です。これについての説明は、皆さんのお手元には事前に郵送されており、既に目を通されているという事で省略しますがよろしいでしょうか。

それでは、困難を抱えた若者の早期発見と予防的な対応について、少し具体的な方策を見いだせればと思いますが、いかがでしょうか、どなたか口火を切っていただけませんか。

○委員

それでは、「Face to Face」のコミュニケーションが大切であると申し上げたのは、私です。それは、相談においてという事もあってです。これだけのユビキダス社会において、単なるコミュニケーションのツールであれば、ネットも携帯電話も否定するものではありません。

相談の手段として、ネットやメールにツールを限定するのであれば、いかがなものかと思うといった趣旨の意見でした。

このコンビニエンスな社会の功罪として、ひきこもりを社会が助長しているのではないのでしょうか。コンビニに行けば、そこでほとんど用事が済んでしまい、支払いについてもカードで会話もなく便利に済んでしまう。デジタル社会で、家に居ながらにして情報も買い物も、色々なものにアクセスして済ませられてしまう。便利な反面、人とかかわりを持たなくて済む社会にしてしまっている。

具体の策として申し上げられなくてすみませんが、このひきこもりの前段階で多くの方が不登校を経験していると統計などでも出ています。その不登校の原因に、いじめというものが考えられます。不登校の原因分析や、いじめを無くす対策といったものがひきこもりの予防につながるのではないのでしょうか。

○委員

確かにおっしゃるとおり、中学生の子どもやお友達をみていると、嫌なことはメールで済ませ楽しいことはお喋りしているように感じます。以前にもお話ししましたが、共働きのご家庭では、子どもが喋りたい時に相手がいなくて、喋る力、コミュニケーションが苦手になると同時に、喋らなくてもいい社会にしてしまっているみたいに思います。

いまの、スマートフォンですか、指を画面でサッサと動かして操作する。あれも、誰でも感覚的に操作できるようになっているんでしょうけれども、小さい子もサッサと操作しているのを見ると、ちょっとびっくりもします。私なんか、苦手なのでわけがわからないんですけど。

○委員

私は学生と接していて、コミュニケーション能力が落ちているとは感じていません。ただ、話をしたくない相手とは喋らない、知らない人とは喋らない傾向にあるなという感じはします。

私がいただいた資料3の調査結果から感じたことは、都市部の新宿で区や地域のイベントへの参加経験が6割と高く、中学生や青少年が地域とのかかわりを持っているんだなと感じました。ただ中高生ルームのように、大人が与えようとする8割が「参加するつもりはない」としています。なにか、このあたりがポイントのような気がします。

○委員

前回の協議会で、啓発活動のところで「あんだんて」の利用が増えたのはなぜか、ポスタ

ーをみただけじゃ来ないはずだといったお話がありました。

私の近所の娘さんで、20代でひきこもり、今30代の方がいらっしゃいます。昨年、部会でしんじゅく若者サポートステーションを視察させていただいた後すぐにお話をしたんですが、足を運ばれませんでした。今回の部会で「あんだんて」を視察した後も、お話をしたんですね。旧東戸山中学校の跡地に、こんな所ができたって。するとその娘さんは、卒業生で、それなら行ってみようという話になりました。彼女の場合は、卒業した所、それが力になったみたいですね。ですから、地域の中に少しでもそういう場ができたらと実感しました。

○福富部会長

先ほどの委員から、調査結果の中に地域とのかかわりが多くてという話がありましたが、実際に子どもにかかわっている団体の委員の方々に伺いたい。やはり、小学生、中学生、高校生、若者と成長するにつれて、地域行事に参加しなくなっているのでしょうか、実感としてどうでしょうか。

○委員

小学生、中学生、高校生、と年齢が上がるにつれて、地域活動への参加は少なくなっています。と言うのも、小学生までは地域のお友達と一緒に参加してくれますが、中学生になって地域から遠い学校に通うようになると、お友達の関係でお友達のいる地域で過ごすことが多くなるんじゃないでしょうか。でも、会えば挨拶はしてくれます。高校生になると、さらに活動範囲も広がりますし、シャイになるのか挨拶も少なくなってしまうですね。

○委員

そうですね。中学生くらいを地域の行事に引っ張ってくるのは難しいです。多くが、部活にぶつかってしまうこともありますし。

でも、先日、学校公開の時に、大学生が来まして、大学生ですので担任の先生も、校長先生も変わられていましたが、嬉しくて変わってしまっただけでしたが、校長先生に卒業生ですってと連れて行っちゃいました。その子たちは、金髪でしたけど、地域で子どもたちに野球を教えているとか話していました。そんなこともあります。

○委員

私たちは、牛込地区で中学生が企画する運動会を、10年ぐらい続けています。中学生が企画をし、私たち大人がお手伝いをする。中学生は自分たちで企画するのですから、本当に生き生きとしながらやっています。

○委員

調査の中にある、地域活動に参加する6割の方々は、小さい時の参加かもしれないけれど、中学生になって活動を続けたり、挨拶だけになったり、でも大学生になって地域に目をむけてくれたりしているのです、私は、そんなに心配はしていません。むしろ参加していない4割が、大変心配なんです。地域の中でのイベントに参加される家族は、大体決まっていて、今回も来てくれたという感じの家族がほとんどです。

実は、今日の午前中に小学校の学芸会がありましたので、見てまいりました。本当は、明日が参観日ですが、用事があったものです。それで、児童の鑑賞日に見学させてもらったんです。発表をしているお子さんや鑑賞しているお子さんの様子を見ると、元気なお子さんもいらっしゃるんですが、反対に元気がないお子さんや、まわりからちょっかいを出されて何もできない気になるお子さんもいました。そういった気になるお子さんのご家庭が、地域のイベントには来てくださらないんです。本当に、参加されない家族を、どう巻き込んでいくかいつも悩んでいます。

○委員

雑誌編集に携わっていた時に、色々なお母さんに会って話を伺いました。多くのお母さんは、核家族化、少子化ということで体験がなく本当に悩まれていました。反抗期の中学生に対応しきれずに、いい子、いい子で育ててしまう。集合住宅で大きな声を出して注意もできず、否定しないで肯定する仮面のお母さんになってしまう。すると、子どもたちは注意されずに育つので、外で他人から否定された時に潰れてしまう、そんなお話も聞きました。

○委員

コミュニケーションをうまく取れない人というのは、自分のことをうまく話せないのではないのでしょうか。話すテーマを出してあげたり、自分のことを言う場を作ることも必要なかもしれないと思います。

○福富部会長

そうですね。私は調査結果で、家での話し相手の多くが母親であり、父親が少ないことが気になりました。これは、母親の負担が相当大きいと思います。反抗期の中学生になって、はい父親の出番ですよと言っても、それは無理。父親とのかかわりは社会への第一歩というように、父親の子どもへのかかわりは、思春期前の児童期が非常に重要です。

○委員

そのとおりだと思います。児童期、幼児期のかかわりは、非常に重要だと私も思います。

よく、色々な園で「おやじの会」といったものが組織されて、活動されています。あれは、一見、子の育ちへのかかわりに見えますが、一方では親同士のつながりや親の育ちにもつながっていて大変意味があると考えます。

○委員

最近では、イクメンなんて言って、子どもの小さいころにお父さんたちもとかかわりましょうといった雰囲気になってきていますよね。イベントも、いろいろ開催されています。子どもが成長した時に、おむつ替えを体験していると、そんなことも言えたりしますよね。父親のかかわりは、幼児期だけじゃなくて反抗期や思春期にも重要ですから、イベントに盛り込めるといいですね。

○福富部会長

まあ、イベントは国がようやくワークライフバランスを声高に言い始めたので、そちらの錦の御旗に任せるとしまして、我々が議論している若者支援にかかわるところでの父親について、いかがでしょうか。

○委員

いかがでしょうかと、私に振られても。皆さんのお話を聞いておまして、子どものおむつを替えなかった私は針のむしろのような思いです。また、少子高齢化社会ということで、私は高齢者の方ばかりを勉強しておまして、そのような間に若者がこのような事態に陥ってしまい、今のような社会を作ってしまったのも私たち大人の責任として反省しきりであります。

本当に、父親の威厳と言いますか、そういったものが無くなってといいますか、薄れてしまったのかなと感じます。今日も、朝のドラマでお父さんが娘の顔をひっぱいたり、ちゃぶ台をひっくり返しているのを見て、感慨深く思いました。

○福富部会長

いや、ひっぱいたり、ちゃぶ台をひっくり返すのが、父親の威厳かという、必ずしもそうではないんじゃないかと。

今の日本の父親の育児時間の統計などを見ると、必ずしも多くなく、それをいきなり改善することは難しい。であるならば、父親になる前に、子どもと関わることの重要性なりを伝えておく必要があるんじゃないかならうかと思えます。

子どもができてから、両親学級でおむつ替えを体験しようと思っても、仕事で両親学級すら参加できない状態にある。それなら、中学生や高校生の時に、おむつ交換を体験してもいい

いんじゃないでしょうか。

○委員

そのことですが今、新宿では中学生の職場体験として、保育園で生徒がおむつ替えなんかを体験しております。初めは、照れてやらない男子生徒も、体験した後では、なにかその子らしいかわりをするようになったなんて、お話を聞いたこともあります。そういった、職場体験といった意味合いではなく、伝えていくことができれば素晴らしいですね。

○福富部会長

最近の学生の父親といったところでは、いかがでしょうか。

学生を見ていると娘さんと母親とは友達関係というか、互いが依存しあっている関係が多くみられるように感じてならないんですね。また、少し前にあった息子と母親の関係、マザコンといったような、そのあたりはいかがでしょう。

○委員

大学の説明会では、お父さんと一緒に来られて、「何か質問がありますか」と聞くと、就職率はどれくらいか、就職先はどのようなところかと、お父さんが質問をしてくれます。お父さんの方が、大変詳しく、そして熱心ですね。

○委員

私の場合は、両親ともにお見えになり、質問に御両親がお答えになる。「あなたの、お考えはいかがですか」とお子さん本人に聞かないと、本人が一切喋らない家族もあります。ご両親が、親の価値観の中に子どもを置いてしまっているようなところも見られます。

○委員

今、親が家庭で料理を作らないことも、一つの原因ではないでしょうか。コンビニで買ってきたものや、お弁当をスーパーで買ってきて、食卓に並べるだけ。食育というのは、体の健康だけでなく、心の健康にとっても大事なことなんじゃないでしょうか。

○委員

そう思います。

以前は専業主婦の方が多く、食事を家族皆で揃って食べた。しかし、共働きが多くなると、食事は作っても、後で温めて食べてとか、メモだけ残して出勤しなければいけない。皆で揃って食事をして、そこで今日何があったとか、話しながら食べる。そんなことが、少なくなっているんじゃないでしょうか。食育、家族そろっての食事、大切なことだと思います。

○委員

私は、家庭における父親の参画や食育の取り組み、また先ほどお話が合った地域活動での取り組み、どちらも重要と考えます。さらに、資料の3で私が着目したのは、気軽に相談できる相手の回答に学校の担任の先生が9.3%で、さらに本来機能しなければならないスクールカウンセラーにいたっては、さらに低い4%という数字。ここに着目しました。ここを、もう少し底上げする必要もあるのではないのでしょうか。

また具体的な方策を出せずに総論的な話になってしまいますが、若者支援の予防的な対応は家庭、地域、教育が三位一体となって取り組むことが必要であると考えます。「生きる力」を掲げて取り組んできた教育も、新たな学習指導要領に代わって、さらに期待したいと思います。

○福富部会長

確かに、家庭、地域、教育が三位一体の取り組みは、当然必要でしょう。しかし、新学習指導要領になって、本当に教育に期待できるのでしょうか。私はそうは思わない。むしろ逆です。

数年前に、ゆとり教育を取り入れて総合の時間を導入するにあたって、さんざん議論をした。学力の低下は見られるかもしれないが、それよりも「生きる力」が重要だとして、ゆとり教育にシフトした。しかし、結果はどうだろうか。教育は「生きる力」は、否定こそしないが、大きく掲げることができるのだろうか。学力低下は予測されていたにもかかわらず、その兆候が見られたら、新指導要領だ。おそらく、今後学力向上にシフトしていくと思います。

また、スクールカウンセラーの制度も、導入すべきでなかったと思っています。スクールカウンセラーが行うべきカウンセリングの能力は、本来担任が持っているべきものであって、その能力が低いからと言ってスクールカウンセラーを導入する。これでは、単なるアリバイづくりでしかない。

○委員

たぶん、ゆとり教育で育て、親になっている一人だと思います。学力偏重になっても困りますが、PTA活動で色々なご家庭を見ていると、子どもが子どもを育てていると言ったら失礼かもしれませんが、そんなご家庭も少なくありません。イベントで食べたら、ゴミはそこに置きっぱなし。ゴミはゴミ箱に捨てるんじゃないですかと、親と子ども両方に言わなければいけない。それが、「生きる力」の結果というもの、どうかとも思います。

ただ、学校の先生も大変忙しいのが、現状です。研修や会議、気になるお子さんの声にも耳を傾けたい、本当に大変な中で頑張っている先生もいらっしゃいます。

○委員

いろいろと教育について難しいと意見が出される中で、あえて教育も含めて予防的な対応を進めていく必要があると考えます。なぜならば、ひきこもりの芽は、不登校も含めて中高生の多感な時期に現れているからです。中高生のライフスタイルを考えれば3年生は進学の時節、1・2年生は部活に多くの時間を費やすグループと部活に参加しない、いわゆる帰宅部に分けることができると考えます。このそれぞれのライフスタイルに合った、予防的対応を考えてみてはいかがでしょうか。

○委員

多感な時期といえば、反抗期ともいえると思うんですが、今は早くなってきて小学校の高学年あたりから出てきています。そのため、反抗期や思春期の話を、小学校高学年の保護者の方々にすると、もっと前に話を聞いていけばよかったって言われるんです。そこで、小学校低学年の保護者の方々にお話をすると、就学前に聞いていけばってなって、就学前の保護者の方々にすると、それこそ妊娠中についてお話になったんです。それで、妊娠中の方々にお話をすると、もうお分かりでしょうけど、妊娠する前とか、それこそさっきの中高生のおむつ替え体験じゃないですが、そんな時に聞いていけばなんて話にまでなって、堂々巡りでどうしようかって、悩んじゃったりするんです。

○福富部会長

そうなんです。こういった、予防的な対応策を話し合うと、堂々巡りになるんです。

それでも、考える。意見を出し合う中で、いい知恵が出てくる。

○委員

学校の先生は忙しい、忙しいと言われるし、先ほどもそのようなお話がありました。

でも、ドロップアウトしてしまう子は実際にいて、どうすればいいんでしょうか。そのまま、いいんでしょうか。

○福富部会長

よくない。

よくないから、より具体的に、地域として区として何が出来るか、今議論しているんです。

○委員

学校は、秘密主義だから。

そんなに忙しい忙しい大変だと言うのなら、地域のボランティアを吸い上げて活用するとかしてくれたら、いくらでも協力するですけども。

○委員

学校、地域でというお話ですが、学校も来年から40人学級から35人学級に代わります。すると、今までは学区で40人の新生が入っても、そのまま学区の学校に通えました。でも、来年からは40人の新生が入ったら、5人は学区の学校に入れなくなり、他の地域の学校に行かなくちゃいけなくなります。そうすると、先ほどの中学生の地域活動でお話があった、地域でのかかわりというのも薄れてくる心配も持っています。

○委員

よろしいでしょうか。

ひきこもりやニートといった若者が抱えている課題や、その抱えている年代において予防的対応は異なるんじゃないでしょうか。全体で考えてしまうから、総論的になってしまったり、堂々巡りになってしまうんじゃないでしょうか。

もっと、それぞれを考えていけば、具体的な取り組みを見いだせると思うのですが。

○福富部会長

実は、そう思っているんですが、本日は個別に掘り下げるのではなく、自由に意見交換をすることで、柔軟に考えてみたいと思うんです。

そこから出てきたものを、次回、整理して具体的に取り組みを考えていこうと。

○委員

学校現場を、教育の側面ではなくて別の側面から見ると、新宿には「ひろば」がありますよね。どんどん、広がっていると思うんですが。

○事務局

そうですね、学校も35人学級に向けて、教室を確保するために特別教室を無くしてしまわざるを得ないなど大変厳しい状況ではありますが、子ども家庭部関連で申し上げますと、放課後子どもひろばが、確かにございます。

今年度から全校で実施し、子どもさん達の自主的な活動を支援する居場所としての機能を持っています。そのため、先ほどお話のありました、ドロップアウトしてしまったお子さんの学習指導までは対応が難しくなってございます。しかし、各学校の先生も非常に努力されておりまして、ひろばの学びの場とは別に、基礎教育の充実ということで、放課後に特別に指導されているところもございます。こういった場合は、ひろばとも譲り合いながら、場所

を活用して、お子さんに対する支援を行っております。

また、子ども家庭部関連でお話させていただけば、児童の健全育成の観点から、児童館や学童クラブにおいて、予防的な対応につながる活動も行っております。地域における、子どもたちによる企画の行事が好評であり、そのような中で意見交換を行うことが、ひとつのコミュニケーション能力の向上につながるのではないかといたお話をございました。児童館においても、一部の行事の開催にあたっては、子ども会議と言うとわかりやすいでしょうか、子ども達が考えて準備し、指導員がそれを手伝い実施するといった取り組みもおこなっております。

○委員

今のお話ですと、ひろばのそばで教育職の先生が指導されているんですね。まず、そのひろばに地域のボランティアの方が入っていくというのは、いかがでしょうか。教育のところに入っていくのが難しくても、学校で行っている事業に入ってそこから、さらに入っていく。今、地域には団塊の世代の方々が退職されて、経験豊富な人材が沢山いらっしゃる。そういった方々を、もっと活用すべきじゃないかと思うんですね。

○委員

地域とのかかわりを学校単位で考える考え方もあると思うんですが、新宿はまちづくりということに積極的なところだとも思うんですね。以前、神楽坂のまちづくりにかかわっている方から、お話を聞く機会がありました。今では、それこそ観光地としても有名になりガイドブックも作られて、週末には沢山の人が訪れています。しかし、10年も前は、それほど人も多くなく、若い方々も定着せずに、まちを出て行ってしまっていたそうです。

ですので、まちづくりといったところから、地域とのかかわりについて何かいいヒントが得られるのではないのでしょうか。

○委員

ちょっと、話は違うかもしれませんが、新宿といったまちで考えると、高田馬場のラーメン屋さんも有名ですね。お店を出して、お客さんに受け入れられるようになるまでには、相当な苦労があったと思います。そんな経験談を聞きながら、お店を回るようなイベントを実施してみるのはいかがでしょうか。生きた教材から、学ぶことはとても多いと思います。

でも、企画できたとしても、どうPRするかが難しいかもしれません。

○福富部会長

そうなんです。そこなんです。

企画はできるが、どうPRするか。具体の意見をいただきたい、ポイントの一つ広報啓発活動のところでは。

とかく行政は、チラシを作って終わってしまっているように思えるのです。

○委員

区役所や出張所に行くと、チラシが沢山置いてありますよね。でも、チラシが多すぎて、何が何の情報発信しているのかよくわからないんですよ。

○委員

確かにそのとおりなんですけど、しかしニートやひきこもりの方々に、どうやって情報を届けばいいのか。本人たちに、聞いてみるのが、やっぱり一番いいですよ。

○委員

出てきてもらえないから、意見も聞けないじゃないですか。

○委員

本当に難しいですよ。単に情報を発信するだけでは。

だからでしょうか、雇用の面ですが、国も変な助成をしているじゃないですか。お試し期間のようなものを設けて、3カ月とかそういった若者をトライアル雇用すれば、助成金を出すことをやっていますよね。3カ月以降は、本採用しようがしまいが、助成金だけ払いますみたいなことを。

あれも、苦肉の策なのでしょうけど、結局本採用には結びつかず、助成金だけ払って国はやっていますよ、企業も協力はして助成金だけうまくもらっているような形になっているように思えます。

大学卒業3年後まで、新卒扱いにしましょうというのも同様で、何か根本的な若者支援にはなっていない気がしてしょうがない。

○福富部会長

そうですね、そういった国や企業のことも視野に入れながら、区として何か提言していきたいと考えています。

そろそろ、終了の時間が近づいてきました。

今回は、若者へのアクセスの仕方、情報提供の方法。また、課題を抱えた若者への、具体の支援策。さらには、予防的対応、コミュニケーションも含め、教育、地域、家庭の三位一体の取り組みといったお話もありました。これらについて、その具体的な方法についてまとめをおこなって、今年度末の全体協議会をへて、新宿から、それこそ全国に向けて何か提起

をできたらと思っております。

それでは、あと10分ほどお時間がありますが、今日のことも、そのほかの事でも何かありましたら、どうぞ。

○委員

今日のことでないんですが、前回の協議会でお話の合った、「30歳のつどい」についても、よろしいでしょうか。

○福富部会長

どうぞ。

○委員

当日に、アンケートとか、参加された方や若い方から、意見をもらうようなことをされるんですか。

○事務局

はい。当日、参加された方全員に、アンケートに御協力いただきたいと、考えてございます。

性別や年代といったことに始まり、どのような催しが良かったのか今後の参考にするためにアンケートを実施します。また、自由にご意見を記入いただける箇所も設けて、若者支援を行っていくうえで何かヒントと言いますか、そういったものを得られればと考えております。

○福富部会長

そうですね。啓発活動や周知の一つの形として、このようなつどいの開催も意味があることだと思います。

○委員

周知と言えば、「30歳のつどい」は区報では見たんですけども、その他に周知はされていないのですか。

前回の協議会で、チラシは見ましたけれども、その他で。

○事務局

周知としましては、区報や前回の協議会でご報告させていただきましたチラシの他に、若者の多くが情報収集の手段として活用しているインターネットを使い周知しております。

区のホームページの他に、ツイッターですね。今回は、そちらを特に力を入れてやっております。

○委員

ツイッターは、区のトップページから見られるやつですか。

○事務局

そうです。そちらから、ご覧いただけます。

○福富部会長

新しい試みで、なおかつ若者の情報収集方法に適した、情報発信をされているということで、大いに期待したいところです。

それでは、そろそろ終了の時間となります。次回の部会で、最終的なまとめをいたしたいと思っております。それまで、各人で大変な宿題となりますが、具体的な対策をお考えいただきたいと思います。

本日は、いろいろとご意見をいただき、ありがとうございました。

午後 3時30分閉会